

「日没まで上げられた手」井上隆晶牧師
出エジプト 17 章 5～13 節、詩編 106 編 28～33 節

①【岩から水を出す奇跡】

イスラエルの民がレフィディムに宿営した時、飲み水がありませんでした。そこで民がモーセに不平をいうと、モーセは岩を打って水を出したという奇跡物語が記されています。民数記にもこれと同じような記事が出て来ますが、ここではカデシュという別の場所で起こった出来事です。イスラエルの民は飲み水がなかったので、徒党を組んでモーセに逆らい「なぜ、こんなひどい土地に会衆を引き入れたのか。ここで死なせるためか。ここには食べる物も、飲み水もないではないか」と訴えました。モーセが神に祈ると、神はモーセに「あなたは杖を取り、共同体を集め、彼らの目の前で岩に向かって水を出せと命じなさい。その岩から彼らのために水を出し、共同体と家畜に飲ませるがよい。」と言われました。そこでモーセは共同体を岩の前に集めてこう言います。「**反逆する者らよ、聞け。この岩からあなたたちのために水を出さねばならないのか。**」（民数記 20：10）そしてモーセが手を上げて杖で岩を二度打つと、水が出たのでイスラエルの共同体はその水を飲むことができたのです。ところが主はこの後、モーセとアロンに「**あなたたちはわたしを信じることをせず、イスラエルの人々の前にわたしの聖なることを示さなかった。それゆえ、あなたたちはこの会衆を、わたしが彼らに与える土地に導き入れることはできない**」（民数記 20：12）と言われました。私たちはこの記事を読むとき、モーセの行為のどこが神に不信仰とみなされ、神の怒りを買う結果になったのだろうかと思ひます。一つ考えられるのは最初は「岩を打て」と言われて岩を打って水を出したのですが、二度目は「岩に命じて」と言われたのに怒りにかまけて岩を二回打ったからだと思ひれます。神の言葉を軽んじた罪ということでしょう。もう一つは「**この岩からあなたたちのために水を出さねばならないのか**」というモーセの言葉は「何でお前たちみたいな不信仰な者に私は仕えなければならないのか」という意味ですから、民に対する彼の怒りを表しており、岩を二度打ったことはモーセのうっぷん晴らしを表しています。つまり神の忍耐強さ、憐み深さを表さなかった罪ということになります。「聖」と云うのは「区別する」という意味ですから、神を人間と同じような短気な者のように表したことが罪だと言われたことになります。詩編にはこのときの事を「**彼らはメリバの水のほとりで主を怒らせた。彼らをかばったモーセは不幸を負った。彼らがモーセの心を苦しめたので、彼がそれを唇にのせたからである。**」（詩編 106：32～33）と書いています。このモーセが負った不幸というのが約束の土地に入れなくなったことです。ここを読むと信仰の世界は何と厳しいものだろう、誰が従うことができるだろうかと思ひます。私たちは簡単に怒り、それを唇に載せます。「主の僕たる者は争わず、すべての人に柔和に接し、教えることができ、

よく忍び、反抗する者を優しく教え導かねばなりません。」(Ⅱテモテ 2:24)と書かれています。この世の人はクリスチャンを見て、神を見ようとします。あなたが何にでも文句を言い、怒ることが早いなら、ああキリスト教の神様とはこういう方だと思われるのです。私たちはキリストと云う看板を背負っているのです。

●カルトからの救出をしていたころ、ある方の所に 24 回も通いました。もう限界だと思った時に、その方はカルトから脱会されました。どの教えが間違っていたかを尋ねると、教えの内容ではなく「私たちこそ本物の愛だと教えられた。でもあなたのように出来ない。あなたを動かしている神様に会いたくなった」という答えが返ってきて恥ずかしくなりました。私はいいやや通っていて、愛などなかったのに、それでも知らない内に神様の道具にされていたのです。

感情がついていなくても、行動で神の愛を示しましょう。それで充分です。岩が打たれて水が出たように、キリストが打たれたことにより命の水である聖霊を私たちは飲ませてもらいました。その打たれたキリストを思い、いつもイエス様ならどうされるだろうと考えて語り、行動するようにしましょう。

②【日没まで上げられた手】

イスラエルの民がレフィディムに宿営した時、アマレク人の奇襲に逢いました。そこでモーセはヨシュアを呼び「男子を選び出し、アマレクとの戦いに出陣させるがよい。明日、わたしは神の杖を手にとって、丘の頂に立つ」といいました。モーセが手を上げている間、イスラエルは優勢になりますが、モーセが手を下ろすと、アマレクが優勢になりました。しかし手を上げ続けるというのは大変な労働です。だんだんモーセの手が重くなってきて下がってくるので、兄のアロンとフルが石を持ってきてモーセに座らせ、彼らはモーセの両側に立って彼の手を支えました。こうして、日が沈むまでモーセの手はしっかりと上げられたままだったので、この戦いに勝つことができたというのです。手を上げるのは神への祈りの姿勢であり、神の杖を手を持つのは、この戦いが神の戦いであることを表しています。丘の下で戦っているイスラエル兵は、丘の上でモーセの手が上がっているのを見て、ああ自分たちは祈られている、神の御名によってこの戦いをしているのだ、と確認し勇気が出たことでしょう。手を上げなくても祈ることは出来るのですが、祈っていることを知らせるためには、このポーズが必要だったのだと思います。

●尻枝正行神父の本の中にこんな話があります。「私の友達に、イタリア人のフェルッチョという神父様がいるのですが、…その神父様のところに、朝からひっきりなしに母親、若者、嫁とか姑が行くのです。そしてその神父様に何でも話すわけですね、姑は嫁の苦情とか、嫁は姑の苦情とか、…神父様はそれをずっと聞いていて、夜になると、その聞いた話をふろしきに包んで、ご聖櫃の前の一番近い席に腰かける。そしてふろしきを解いて、聞いた話を、つまらん話でしょうけど、今日は誰々が来てこれこれこうでしたよ、

とイエス様の前でずーっと報告しているのですね。すると時々後ろの戸が開いて、村人がのぞく。そして自分の話をちゃんとイエス様に聞かせているんだ、と彼らは安心して家に帰っていくのです。」

人は自分はいつも祈られていると思うと安心するのだと思います。祈る背中を見せることはとても大切なことだと思います。

祈り続けるためにはモーセ一人では無理でした。兄のアロンとフルという二人の者がモーセの祈りを支えるために必要だったのです。ここを読むときに思い出すのは、イエス様の言葉です。「どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心をつにして求めるなら、わたしの天の父はそれをかなえてくださる。二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」(マタイ 18:19~20) 緊急の時は一人で祈ることが必要ですが、普段は一人で祈ると眠くなります。しかし他者がいると緊張して眠くなりませんし、相手のために祈ろうと集中することができます。やはり一緒に祈ってくれる人が必要なのです。

●佐藤雅文という牧師が「祈祷の生涯」という本を書いており、その中に祈祷は肉体労働であることが書かれています。

「祈祷には肉体が霊的なことに耐えられない困難がある。しきりに祈祷の終わるのを待っている。だから、肉体を引きずるようにして祈祷の中に突き進むより他に道はないのである。…詩篇の祈祷の多くが困難に始まり困難の中にあっても勝利に終わっている。…これゆえ、祈祷においてどうあっても必要なのは忍耐である。」さらに、祈りは困難を征服する力であることが書かれています。

「どんな事件であっても事件がただ事件としてある間は、真に困難である。しかしこれが神の手に委託された場合には、すでに困難はその困難であるべき資質を失っているのである。…概して、多く祈る者には精気がある。祈らない者は無気力である。常に祈る者には一種の新鮮さがあって、どんなことにも勝っていこうとする反発力に満ちている。…祈らないときには、困難が大きく見えているが、祈祷後、困難は何割か小さく見えてくる。」

祈らない人は、祈りがキリスト教徒にとってどれほど強い武器であるかを知らないのです。祈るとキリストの力が大きく見えてきて、この世の問題やこの世の事柄が小さく見えてくるのです。祈りは人に勇気と希望と喜びを与えます。どんな困難がやってきたとしても、神に祈るならばそれに勝つことができます。祈りの力を知り、それを行う人にさせていきましょう。